

おやさまによって敷かれたレール

共時性について

去る7月28日、マグニチュード7の地震が熊本を襲いました。前回（2026年8月号）に10年前の熊本地震を題材にした1回目の原稿を書き、拙文が関係各所に回っている最中に、今回の地震が起きたのです。この偶然に驚かれた方も多いのではないのでしょうか。

共時性という言葉があります。シンクロニシティともいい、元々は心理学の用語です。たまたま相手のことを考えていたとき、その相手からLINEが届く、といった不思議な現象を指します。この連載を始めることも、もともと予定されていたわけではありません。ひょうたんから駒が出たように決まったものです。

こういう「タイミングの奇跡」は、特に災害の現場ではよく起こります。10年前の地震のときに起きた「タイミングの奇跡」も、今後の連載でいくつかご紹介する予定でした。それに加えて今回のこの「奇跡」は、いったい何を意味するのでしょうか。

ひとつ確かに言えることは、今回の地震で得た新たな知見や、逆に10年前から少しも進歩していないと感じる分野などを、これから書き加えることになるということです。私はここに、親神様の思召しがあり、親神様から与えられた御用であると強く感じました。今回2回目を書くにあたり、一言申し添えておきます。

私は何をすべきなのか

お話を10年前の地震に戻します。

本震の当日、詰所に到着するや否や荷物をまとめ、教養掛も無理を言って代わっていただき、帰途につきました。一刻も早く帰り着くため、軽自動車で高速道を走ることにしました。

前震から2日経っていたこともあり、詰所には支援物資がすでに届いていました。それを軽自動車に積み込むだけ積み込みました。前震の夜からまともに眠っておらず、フェリーでも夜中にたたき起こされています。そこからさらに12時間の運転です。さすがに不安に思っていたところへ、名古屋の友人から電話がかかってきました。奇特にも運転を申し出てくれたので、その言葉に甘えることにしました。

ところが、運転を代わってくれたのはいいのですが、軽自動車でも夜間、猛スピードを出して飛ばします。別の意味で、3日目も眠ることができませんでした。

帰り道の助手席で、私はいろいろ考えていました。

「私は何をすべきなのか」

あまりに漠然とした問いに、明確な答えなど出てきませんでした。

そのときでした。携帯電話が鳴りました。着信表示は、かつて布教部の御用でお世話になった、関東のある大教会長（当時）でした。こんな夜になんのご用かと、恐る恐る電話に出ました。「あ、茶木谷さん、お久しぶり。今ね、近所のホームセンターで水と食料を買えるだけ買って、トラックで熊本に運んでもらっているから。到着したら全部あなたに任すので、後はよろしくね」

「え？ なんで私なんですか」

「だって、熊本に知り合いはあなたしかいないもの。じゃあ、よろしくね」

4トントラック2台で熊本を目指しているとのこと。すでに1台は九州に入っているということです。

熊本に知り合いが私しかいないというのは、嘘だと思います。顔の広い有名な先生でしたから、多少の知り合いはおられたはずです。この瞬間から、2週間にわたる地震支援の毎日が始まるこ

とになりました。いや、感覚的には「巻き込まれた」というほうが正しいでしょう。まさに、ご存命のおやさまによって敷かれたレールでした。

自教会に到着したのは夜中でした。すぐにPCを立ち上げ、ニュースサイトやSNSで情報を集めました。まだ情報は錯綜しており、県庁のホームページにも正確な情報が十分に出ていない状態でした。

メールやSNSを通じて、安否を気遣うメッセージもたくさん届いていました。物資の支援や支援金の申し出もいただいていた。物資はある。拠点を探し、そこから被災者に配布しなければならない。そのくらいのことは想像できました。

このとき脳裏に浮かんだのが、「支援に必要な情報を集めて公開し、参考にしていただきながら、有用な情報のリンクも共有できるサイトを作る」ということでした。

しかし、一から作っていたのでは間に合いません。そこで、当時個人的に利用していたFacebookを活用することにしました。

Webの世界はとにかく広く、一個人が情報を発信しただけでは、発見すらしてもらえません。そこでFacebookの広告機能を利用し、新たなページを立ち上げて広告に出しました。費用は1週間で2万円くらいだったと記憶しています。

ページ名にはずいぶん悩みました。しかし、怒られるのを覚悟で「天理教熊本地震支援情報センター」と大げさな名前を付けました。ここは認知度が最優先だと思い、怒られたら名前を変更すればいい、と割り切ったのです。

支援を必要とする人は何万人もいます。そして、支援したい人もたくさんいます。この両者をうまくつなげなければ、助かる人も助からない。そういう思いでした。

なぜFacebookだったのか。もう一つ重大な理由があります。それは、写真を撮ってアップするだけで、時系列に記録が残ることでした。記憶は嘘をつきますが、記録は嘘をつきません。キーボードを叩いている暇などなく、写真を撮ってアップするだけで精いっぱい毎日になることを予想していました。

このページは現在も残っています。見てみると、最初の投稿は本震から24時間も経っていない、帰り着いた日の深夜に県の情報をアップしたものでした。初期の投稿を読み返すと、手探りで何かを発信しようとしている様子が伝わってきます。そして、ろくに寝ていなかったこともタイムスタンプからうかがえます。

何をすればいいのかわからなかった私の行動が、関東の大教会長によって決定づけられたこと。そして、情報を共有する手段を構築できたこと。この二つが、のちに大きな結果をもたらすのです。



2016年熊本地震発生直後の被災地の様子（筆者撮影）